

## 刊行に寄せて

福岡県求菩提資料館 館長 恒遠俊輔

このたび三浦尚司さんが『豊前幕末傑人列伝』なる著書を出版されるという。

先だって、さまざまな史料をつぶさに検証して書き綴ったその原稿を読ませていただいたが、まさしく根気のいる作業だったに相違なく、氏のご苦勞に対してまずは深甚なる敬意を表したいと思う。それにしても、つぎつぎに新たな著作にチャレンジされる三浦さんのエネルギーには、まったくもって脱帽である。

さて、三浦さんは本書で疾風怒濤の幕末期を駆け抜けた人物十名をとりあげて紹介されているが、あらためてその方々の生き様に触れさせていただき、深い感銘を覚えた。しかも、そこに登場する人々の多くが私塾「蔵春園」ぞうしゅんえんゆかりの人たちであるだけに、彼らの生き方がとりわけ私の心に沁みるのである。むろん、軍国主義時代の強制された「滅私奉

公」などではない。世のため他人のために生きる生き方をみずから選びとって生きるのである。彼らはそれを生き甲斐とし歓びとした。自分以外の命のために何ができるかを問いつけるその姿勢は、実に清々しく心地よい。

私はかねてから、かつての私塾のなかに学びの原点がありはしないか、今日の学校教育が抱える諸問題解決の糸口は私塾教育のなかにこそあるのではないか、そう問いかけてきた。幕末期の私塾には、教える者の「生きた心」があり、「響く言葉」があり、教える者が自らの生き方をぶつけ、学ぶ者の「生き方に迫る」緊張関係があった。そして、そこから、本書に登場するような、閉塞した時代状況を切り拓く素晴らしい人材が巣立っていったのである。

戦後日本、否、明治以来と言っていいかもしれない、人びとは西欧文明に憧れ、モノの豊かさを追い求め、それこそが真の豊かさだと錯覚してきた。おカネで買えるものを買いつぎで、大切な心を置き去りにしてしまった。

そして、今なお、「市場原理主義」「グローバル・スタンダード」といった言葉に踊らされ、本来日本人がもちあわせていたモラルをも古着を脱ぎ捨てるかのようにかなぐり捨てて、人は金銭まみれになって右往左往するのである。精神的に実にみじめな時代だ。

こうしたとき、三浦さんが本書の出版を思い立たれたことは、まさしく時宜を得たものといわなければならない。先人たちの生き方にぜひ多くのことを学びながら、混迷する時代の壁を打ち破る自信と勇気を取り戻したいと思う。

ちなみに、江戸文政年間、豊前の地に私塾・蔵春蘭を開設した恒遠醒窓つねとおせいそうの生誕二百周年を記念して、平成十五（二〇〇三）年に「恒遠醒窓顕彰会」が発足、三浦さんにその副会長をお願いしているが、本書が顕彰事業の一環を担っていただくことになれば、このうえない歓びである。

平成二十四年一月

豊前幕末傑人列伝 ● 目次

## 維新の陰の功労者

## 白石廉作

▽▽ 13

はじめに 14 / 白石廉作について 16 / 白石廉作と生野義拳 18

白石廉作の評価 24

## 手永大庄屋

## 曾木墨莊

▽▽ 27

はじめに 28 / 曾木家の家系 29 / 曾木墨莊について 30

手永大庄屋としての墨莊 32 / 頼山陽との交流 35

田能村竹田との交流 38 / 「梅花書屋図」などの逸話 43

むすびに 46

## 豊前の傑商万屋

## 乗桂・小今井潤治

▽▽ 49

はじめに 50 / 宇島築港の経緯と豪商万屋について 51

豪商万屋・小今井家の家系 54 / 小今井潤治について 55

万屋の諸事業 60 / 社会事業への貢献 64

浄土真宗への帰依と乗桂教校の創設 65 / 小今井潤治の生活信条 68

隠れた逸話 69 / むすびに 71

## 天稟の傑僧

## 末弘雲華上人

▽▽ 75

はじめに 76 / 古刹正行寺の寺歴 77 / 末弘雲華上人について 78

頼山陽との出会い 81 / 田能村竹田との出会い 84

中津藩主・奥平昌高公との出会い 86 / 雲華上人の逸話 88

むすびに 90

## 矢方池築造に命を賭けた

## 高橋庄蔵

▽▽ 93

はじめに 94 / 大庄屋高橋家と高橋庄蔵 95 / 矢方池築造事業 98

高橋庄蔵の生活信条 103 / 高橋家と庄蔵の逸話 106

むすびに 108

勤皇の海防僧 釈月性上人 ≡≡ 111

- はじめに 112 / 釈月性について 114  
 幅広い人脈と海防僧としての活躍 117 / 漢詩人としての月性上人 118  
 釈月性上人の逸話 120 / 恒遠醒窓との師弟の情誼 122  
 覚応から超然へと連なる親交 124 / 吉田松陰との親交 126  
 むすびに 127

藩医として生きた漢詩人 西秋谷 ≡≡ 131

- はじめに 132 / 西家の来歴 133 / 西秋谷について 134  
 村上仏山との出会い 136 / 西秋谷の逸話 139  
 藩医としての西秋谷 141 / 漢詩人としての西秋谷 146  
 むすびに 147

真宗豊前学派を大成した高僧 東陽円月 ≡≡ 151

- はじめに 152 / 豊前における西本願寺派の古刹 西光寺 153  
 東陽円月について 155 / 豊前学派について 159  
 円月が交友した人物 162 / 東陽円月の逸話 164  
 円月の社会事業と福祉活動 169 / 西光寺とゆかりの詩人中原中也 170

漢学私塾「蔵春園」を継承した 恒遠精齋 ≡≡ 173

- はじめに 174 / 恒遠精齋について 175  
 恒遠精齋の学統と蔵春園の教育 179 / 月田蒙齋との師弟関係 182  
 西秋谷との親交 184 / 恒遠精齋の逸話 186  
 むすびに 187

漢学私塾「蔵春園」創始者 恒遠醒窓 ≡≡ 189

- はじめに 190 / 恒遠家の家系 192 / 恒遠醒窓について 193  
 醒窓の学統と蔵春園の学風 195 / 醒窓の実父傳内の教え 198  
 恩師に対する醒窓の厚誼 198 / 葉山鎧軒との交友 199

醒窓の逸話	201
／ 慈愛あふれる醒窓の詩	202
むすびに	205

## 番外編

廃藩置県の悲運に泣いた 千束藩旭城哀史	207
▽▽	

はじめに	208
／ 小笠原家について	209
／ 小倉戦争	210
小倉新田藩主小笠原貞正	213
／ いかにして旭城が築城できたか	216
むすびに	222

参考文献	223
あとがき	227

維新の陰の功勞者 白石廉作

白石廉作

はじめに

平成十五（二〇〇三）年十月五日、豊前市薬師寺の蔵春園ぞうしゅんえんにおいて、広瀬淡窓ひろせたんそうの高弟、恒遠醒窓つねとおせいそうの生誕二百年を記念する祭典が盛大に催された。

恒遠醒窓の漢詩集『遠帆楼詩鈔』（草文書林）の前編と後編を校註出版したという経緯から、私も記念事業に参画した。

この記念事業の過程において、昭和二十七（一九五二）年に郷土史家、岡為造が編纂した『豊前薬師寺村恒遠塾』（築上郡教育振興会）を読んだ。そのなかで、岡氏は醒窓の門弟であった白石廉作しらいしれんさくを特にとりあげ、「廉作は恒遠塾の出身にして漢詩に見られるとおり、



竹浦から移設された旧白石家浜門（山口県下関市）

聖賢せいけんの訓言をよく守って皇室をうやまい、始終君父の恩に酬いんがために奮闘努力した」ことを追慕して、郷土の誇りと述べている。

岡氏の著述にもあるとおり、白石廉作は蔵春園に学んだ勤皇の志士として、醒窓に最も愛された門人の一人であり、若くして倒幕運動に献身して短い生涯を終えた人物である。

私は廉作の生涯に興味を惹かれ、白石家とゆかりのある下関市の旧跡を探索するとともに下関市立図書館を訪ねた。同館にて『白石家文書』（白石正一郎著、下関教育委員会刊）を閲覧するうちに、白石廉作の漢詩集「草稿」を発見し、せめてこれを訓読



して、現代の人々に紹介したいと思い立った。そして平成十六年の春には、上梓直前に  
なって、幸運にも下関市立長府博物館に『白石家文書』掲載の「草稿」の原本が収蔵され  
ていることが判明した。このことにより、同館の学芸員のご協力を得て原本と照らし合わ  
せて、より正確を期することができた。

校註の過程、廉作の漢詩を読み解くことで、醒窓の知られざる一面や私塾蔵春園の当時  
の有様が発見できるのではないかと期待したのだが、その期待は現実のものとなって数々  
の新しい発見をすることができた。

高杉晋作の奇兵隊創設をはじめ、維新の大業のため家産を傾けて物心両面の援助をした  
白石家は、現在では歴史に埋もれた存在に等しい。今回、兄の正一郎と車の両輪の如く活  
躍した弟、廉作の生涯について述べてみたい。

## 白石廉作について

白石家は白石正一郎の誌した『白石家文書』の「祖先年表」によれば、直姓、のち宿禰  
姓、伊予国越智郡の越智姓より起こったとある。系図によれば、十七世紀後半、白石作兵



移築される前の旧白石家浜門（写真提供：萩博物館）

衛資之の代に豊前小倉から長州支藩の清末藩  
領の竹崎浦に移り住んだとされ、この地にお  
いて荷受け問屋を営んで莫大な財をなし、屋  
号を小倉屋と称した。

白石廉作は諱は資敏、字は子寛、文政十一  
（一八二八）年七月二十日、長門国赤間関  
（現・下関市）の白石卯兵衛資陽の六男とし  
て生まれた。母は艶子。幼名は久吉、のち常  
三郎と改め、また廉作と改めた。

明治維新に関する貴重な資料とされる『白  
石家文書』によれば、嘉永元（一八四八）年  
二月二十八日、別家、白石健蔵資澄の娘延子  
を娶り、一女二男が生まれたとある。

醒窓との出会いについては、「醒窓日記」  
によれば、嘉永五（一八五二）年九月二十六

## あとがき

このたび念願であった『豊前幕末傑人列伝』を出版するはこびとなった。

平成十八年、福岡大学名誉教授、武野要子先生のご紹介によって「九州学」研究会の機関誌『海路』第三号に「維新の陰の功労者白石廉作の生涯」を初めて掲載させていただいた。以後、同誌には毎号ごとに幕末期の豊前に関わった傑人について連載を重ねた。七人まで書き上げて見ると、いつの間にか恒遠醒窓の漢学私塾蔵春園にかかわった人物の紹介となっていた。また、豊前の教育文化や社会のために大きな貢献をなした恒遠醒窓と嫡子精齋、さらに醒窓の高弟、学僧東陽円月の三人の生涯を新たに書き加えた。

本書にまとめるにあたって、機関誌紙面の都合で割愛していた口絵写真や資料を新たに追加し、掲載後に明らかになった事実も新たに書き加えて内容の充実を図った。

執筆にあたっては、念頭に置いたことが二つあった。

まずは、今ではすっかり埋もれてしまった傑人たちの知られざる生涯をさぐるには、現地の実踏を必ずやりたいということ。二つは既存の図書館資料にとどまらず、取材で得た新しい内容を少しでも盛り込みたいということであった。

そのためには、現地取材で子孫の方々や親戚筋からも逸話や生の声を聞きたい。

代々伝わる未発表の資料等があれば閲覧もさせていただきたい。それらの新しい内容を記録としても残したい、という強い思いであった。

幸いに、当時、豊前市教育委員会に勤めていた友人の尾座本雅光氏から、彼の親友で郷土史家、橋本和寛氏を紹介していただいた。初めて会ったその日から、橋本氏とは妙に波長が合った。以後、同氏と話し合いながら執筆予定の人物が決まると、橋本氏は事前に子孫の方々と連絡を取ったり、友人の郷土史家などから系図などの貴重な資料を取り寄せたり、墓石や遺跡等への道案内を自ら買って出てくれたのだった。

また、橋本氏の友人である松田博文氏や古屋保氏が同行して、貴重な史跡や資料等の写真撮影に協力してくださった。多くの方々のおかげで、傑人列伝として逸話や興味のある内容を盛り込むことができた。

橋本和寛氏は、小倉新田藩岸井手永大庄屋、曾木墨莊を愛して、みずから墨莊の命日に

は「天随忌」を催しておられたが、平成二十二年、不慮の事故により急逝された。豊前にとっても誠に惜しい気鋭の郷土史家であった。改めて故人への感謝とともに、ご冥福をお祈りする次第である。

私の生まれた豊前という郷土は、まことに素晴らしい傑人たちがいたものだというのが、偽りのない気持ちである。社会のためには身命を投げ打つような、愛郷心あふれた傑人たちがいたことを心から誇りに思う。

現在、私自身、私立大学で教鞭をとっている。大学全入制時代になったいま、大学教育にも江戸時代の私塾教育の良さを取り入れる必要があるように思えてならない。

現在の教育現場では、キャリア教育の重要性が強調されているが、それはまさしく社会力を培うための人間教育に他ならない。人間教育に果たした私塾教育の良さをもっと採り入れていくことを提唱したい。

千里の道を遠しとせず良師を求めて入門した門人たちは、全身全霊をもって学問に励んだ。だからこそなし得た偉業だったにちがいない。

日本は未曾有といわれた東日本大震災に見舞われて以後、国の命運にかかわるような、

重要な岐路に立たされている。

日本の将来を担う若者たちは、社会のために何ができるかを考えるには、まず傑人たちの生き方に学ぶべきだと思う。そして傑人たちの情熱を汲み取って、自らの行動指針に少しでも生かしてもらいたい。

福岡県求菩提資料館館長で、藏春園当主の恒遠俊輔先生には、長年、高等学校教育にあたられた経験から、幕末の私塾に将来の学校教育の原点を求めてはどうかという貴重な序文を頂戴することができた。私もまったく同意見であり、改めて恒遠先生のご厚情に深甚なる感謝を申し上げたい。

また出版にあたり、これまでご支援くださった畏友の麻生徹氏、多大なご尽力をいただいた海鳥社の柏村美央さん、図書館、郷土史家など多くの方々に、心から感謝を申し上げます。

平成二十四年一月

三浦尚司

三浦尚司（みうら・なおじ）

昭和19（1944）年、福岡県豊前市に生まれる。昭和43（1968）年、中央大学法学部法律学科卒業。北九州市警察部長を経て、平成16（2004）年福岡県警察（地方警務官）を退官。現在、九州国際大学特任教授、公益社団法人日本詩吟学院認可筑紫岳風会会長、全日本漢詩連盟理事、福岡県漢詩連盟会長、朝日カルチャーセンター福岡の講師を務める。

校註著書に『遠帆楼詩鈔』（草文書林）、『白石廉作漢詩稿集』（恒遠醒窓顕彰会）、『和語陰陽録』『こどもたちへ 積善と陰徳のすすめ』（共に梓書院）、著書に『消えた妻女』（梓書院）がある。



ふ ぜん ばく ま つ け つ じ ん れ つ で ん  
豊前幕末傑人列伝

■

2012年2月15日 第1刷発行

■

著者 三浦 尚司

発行者 西 俊明

発行所 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

印刷・製本 九州コンピュータ印刷

ISBN978-4-87415-840-1

[定価は表紙カバーに表示]